
町民を救った攻めの避難誘導

(Jレスキュー・編 ドキュメント東日本大震災、イカロス出版、東京、2011、p.107-123)

2012年5月25日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

●概要●

3月11日、東日本大震災によって、宮城県亶理郡亶理町に防波堤を超えた津波が内陸まで押し寄せ、建物やビニールハウスなど一切を流していった。この結果、この地区の沿岸部は一瞬にして平原となった。このような悲惨な事態の中、救援活動では地元の消防団の活躍が多く命を救った。なぜ、想定を大きく超える規模の災害時でも、この地区の消防団は即戦力として機能できたのか。本論文では、この地区で実際に行われた救援活動の特徴と問題点、今後への課題について考察している。

●亶理町消防団が即戦力として機能した理由●

まず、注目すべきなのはその敏速性である。亶理町は東北でも有数のイチゴの産地であり、500名の亶理町消防団も団員の多くがイチゴ農家を営んでいた。このため、彼らの職場であるイチゴ栽培のハウスはだいたい自宅の前にあり、召集指令から5分もあれば集結して出動することができた。

次に注目すべきなのが、避難誘導に対する共通の意識が団員たちにしっかりと浸透していた点である。亶理町消防団員たちは、集結後着の身着のままで車両に乗り込み受け持ち区域の災害弱者宅へ急行し、状況を説明しながら積載車に乗せて避難所へ向かうというピストン搬送を開始した。「何かあれば少々強引でもまず全員を避難させる」という意識を団員たちが共有していたことで、高齢者などの犠牲を出さずに済んだ地域もあるなど多くの人命が救われた。

さらに、消防団がスムーズに救援活動や避難誘導を行えた背景には住民たちの意識も関係していると思われる。亶理町では消防団だけでなく住民の防災意識も非常に高く、地域防災組織が積極的に編成されていた。県では、昭和53年宮城県沖地震が発生した6月12日を「県民防災の日」と定めている。これに合わせて「6.12 防災訓練」が実施されており、住民は訓練を通じて「なにかあったら即行動に移る」ということが意識付けされていた。

●問題点と今後の課題●

上記のように亶理町のさまざまな取り組みが災害時に有効に働いた一方で、現在、この消防団では団員の離散が深刻化しており、大きな問題になっている。

津波で被害を受けた地域は、東北一のイチゴの産地として知られる地域であったが、イチゴ栽培面積の大半は全滅状態になってしまった。農家を継続して生産したいという意欲は高いものの、瓦礫などを排除しても塩害によりすぐに栽培を再開できる状況ではない。亶理町が消防団員数や若い力を確保し即応可能な戦力として機能していた大きな要因の1つに、亶理町が活気のあるイチゴ産地だったということが考えられる。つまり、イチゴ農家の復興は消防にとっても重要な意味をもっており、被災地での消防力を震災前の水準に戻すためにも、一刻も早い地元産業の復興が望まれている。